人事の哲学

大転換期を支える中国古典の智

第八話

「ワーク＆ライフバランスがうたわれ、仕事と人生、仕事と家庭など、新しい課題が生じているが、どう対処するのが最善か」

田口佳史

Yoshifumi Taguchi_老荘思想家。株式会社イメージプラン代表取締役社長。老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を掲げ、これまで2000社にわたる企業を変革指導。また官公庁、地方自治体、教育機関などへの講演、講義も多く1万名を超える社会人教育実績がある。最近の著書に『清く美しい流れ』(2007年 PHP研究所)、『タオ・マネジメント』(1998年 産調出版)。08年、日本の伝統である家庭教育再興のため「親子で学ぶ人間の基本」(DVD全12巻)を完成させた。

Text = 千葉 望
Photo = 鈴木慶子、新井啓太（書画）

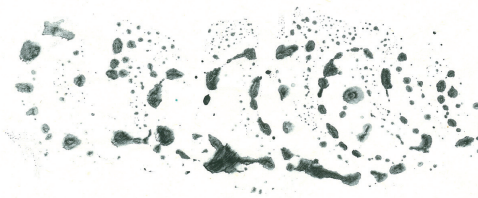
景気回復の兆しが見え始めたかと思えば、また一方で自動車業界のリコール問題や大手企業同士の合併話の破談など、ともすれば後ろ向きに思われる話題が続く。こういう空気は個人にも派生しがちで、ビジネスパーソンが悩みに翻弄され、私も「どうすれば現在の混乱期に対処できるのか？」と訊ねられることが少なくありません。しかし、

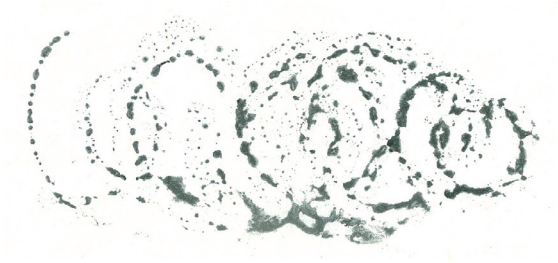
「こういう問題が起きたらどうすればよいのだろうか」

という問いに対する答え、つまり事後の対処に対する解答は、中国古典はあまり得意ではありません。むしろ事が起こらないようにするための事前の注意事項が説かれているのです。社会が混迷しているときほど、それに引っ張られて自分も自社も混乱し、問題を起こさないよう、不動心など自己の確立とブランド戦略など自社独自の安定性の構築を求めているのです。これが今、もっとも大切なことと考えます。

本来のワーク＆ライフバランスについて考える

さて、今回は「ワーク＆ライフバランス」について考えていきましょう。今、日本で叫ばれているワーク＆ライフバランスは、そもそも「バランス」がとれた議論になっているでしょうか。私にはそう思えないことが多いのです。本来のワーク＆ライフバランスとは、「人生を豊かにすること」が本義であるはず。確かに仕事一点張りの人生はさびしいものですが、それでも「今は仕事に徹底して打ち込みたい！」と考えている人にとって、労働時間の短縮を押しつけられることがよいとは思えません。ワーク＆ライフバランスは、「自由裁量性を持った人生をどこま





で認めるか」

という点に意義があると私は考えます。長い仕事人生にはさまざまなことが起きます。あるときは子育て、あるときは家族の病気の看護や介護などがふりかかってきます。そういうときに、ある程度社員が自由に裁量して仕事のやり方を調整することを認める。これがワーク＆ライフバランスの要諦ではないでしょうか。現在のように単に残業代を減らすためのワーク＆ライフバランスブームなど、発想としては貧困です。

ただ、働く人たちはこれを契機として、自分にとってのよりよい人生とは何かを考えてほしいと思います。

子曰く、富と貴とは、是れ人の欲する所なり。其の道を以てせざれば、之を得とも處らざるなり。貧と賤とは、是れ人の惡む所なり。其の道を以てせざれば、之を得とも去らざるなり。（論語）

「論語」にあるとおり、中国思想では富や出世を否定していません。ただ富貴にも性格があって、道を以てそれを得ないと続かないものです。一方貧と賤もまた、道を以て暮らしを整えていかないとその貧賤の状況から抜け出せないと孔子は述べています。そこで語られているのは「道理」の問題です。道理とは何か。今は「法」はあるけれど「道理」がない。所詮「法」は人間が作ったものです。「道理」は宇宙が作ったもの。どちらが重要かは言うまでもありません。「法律に違反しないからやってもよい」と考える経営者と、「道理に反することはしてはならない」と考える経営者。人は、どちらの下で働きたいと考えるでしょうか。富貴を極めても道理のない経営者に人はついていかないはずです。

自分なりの志を立てて「大丈夫」を目指してほしい

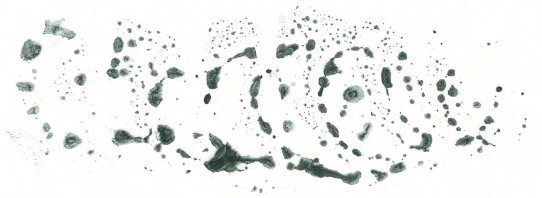
子貢曰く、貧しくして諂ふこと無く、富て驕ること無きは如何と。子曰く、可なり。未だ貧しくして樂み、富て禮を好む者には若かざるなりと。（論語）

貧しくても人にへつらわず、富に驕ることのない人は素晴らしい。しかしこれは第一段階にすぎません。貧しくても人生を楽しみ、富んでのちも礼を好む人にはかなわないと孔子は諭しています。

天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行く。志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ。富貴も淫すること能はず。貧賤も移すこと能はず。威武も屈すること能はず。此れ之を大丈夫と謂ふ、と。（孟子）

「富貴を淫する」、つまりちょっと金を持つと人間はとんでもないことになりがちです。特に若いときは金の魔力に溺れてしまい、道を誤ることが多いもの。少し考えてみても、身につかない大金を得たがために失脚していった人々が思い浮かぶはずです。それでは貧乏ならよいのかといえばそうもいきません。「貧すれば鈍する」の言葉通り、人間が小粒になり物欲しげになってしまう。貧乏でも大志があればよいのです。最近はこういう言い方をしなくなりましたが、「青年よ、大志を抱け」というクラーク博士の言葉は現在も生きています。この場合、志は「天下の志」ではなく、「自分の志」で十分です。

貧富の格差問題が取りざたされていますが、世界に目を向ければどれだけ日本が豊かな国であることか。日本にやってくる留学生の中には、アフリカなど世界の最貧国からきている人たちがいます。彼らは本当によく勉強します。その１人がこんなことを言いました。



大丈夫

富貴に淫せず、貧賤にも損なわれず、居丈高なふるまいをする人にも屈しない。こういう人が本来の「大丈夫」である。

「日本はとても豊かな国です。でも私の母国はまだ貧しい。帰国して父親と酒を酌み交わしたとき、父がこんなことを言いました。『携帯電話を死ぬまでに1台持つこと。それが自分の望みだ』と」

私はその話を聞いて、なんとささやかな望みであることかと思い、ひるがえって現在の日本のありようを憂えました。これだけ豊かになり、贅沢な暮らしをしていてもなお、自分のわがままを主張する人がいます。その傲慢さに私たちは気付かなければなりません。

それでは私たちは何を目指せばよいのか。それを孟子は「大丈夫」と言っています。今、日本では別の意味合いで使われていますが、本来は「大いなる丈夫」、士大夫（科挙出身の高級官僚）を意味する言葉です。

富貴に淫せず、貧賤にも損なわれず、居丈高なふるまいをする人にも屈しない。こういう人が「大丈夫」なのです。「大丈夫」になるために必要なことはまず自立です。そもそもの基本に「自分は大丈夫になるのだ」という志を持ち、生活や仕事の時間配分までも自分自身で考えられなくてはなりません。そういう人を、「ワーク＆ライフバランスがとれた人」と言うべきです。

自立して自己を生きる それが愉快な人生につながる

最近は親が自己を確立できておらず子供を振り回すケースが増えました。自分を確立していなければ、まわりの評価に頼るしかありません。まわりに左右されて、子供の教育をおろそかにする。結局子供が子供を育てているわけです。

昔は子供を早く手放さざるを得ませんでしたから、否応なく成人も早まりました。面倒を見てくれる人がいなければ自立するしかない。現在は親が子供の自立を阻む時代です。しかし人間は自立することで自由を得るもの。自ら立っていくことを目指してほしいと思います。

故に善く戰ふ者は、人を致して人に致されず。　（孫子）

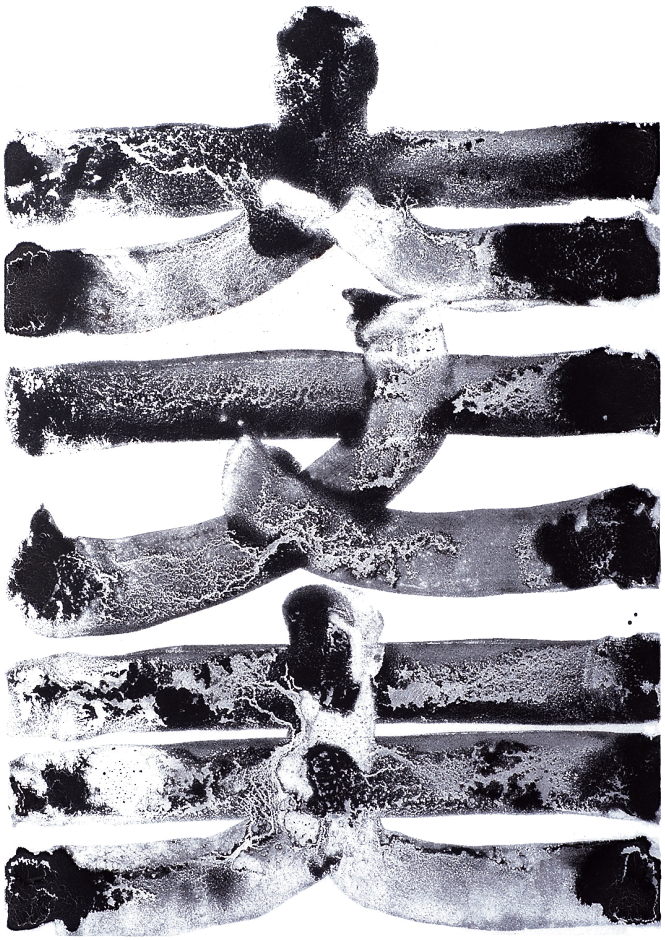
敵軍を好きな方向に右往左往させることが大事だと孫子は言っています。この話を現代に置き換えれば、他人の言いなりになるのではなく、何事にも主導権を持って、自立型人生を目指すべきだという意味になります。愉快な人生と不愉快な人生があるとすれば、愉快に生きるためにはまず他人に左右されない基盤を作らねばなりません。「会社に働かされている」と思うのは自立していない証拠、「自分が会社を食わせてやっている」と言えるほどの気概を持ってはどうでしょうか。また、力関係から言って、会社に貢献していることが誰の目にも明らかになるよう努力することが肝要です。

子曰く、位無きことを患へずして、立つ所以を患へよ。　（論語）

それでも、組織の中で正当に遇されていない、と悩むことはあるはずです。そういう時期には地位がないことを悩むのではなく、自分自身に問題がないか反省してみる。その姿勢が次の成長につながります。人間、誰しも他人を責めたくなるもの。しかし他責を通す人は成長しません。

暗夜に頼むべき「一燈」を持っているか

江戸時代の有名な儒学者に佐藤一



「大丈夫」。中心線と左右双方からの引き合いが見事に保たれたその文字性に着想しました。己は、時によどみ時に乾く流れすらない過酷な道を進みつつも、他に対しては両手を広げすべてを包み込む。大丈夫とはそんな人ではないでしょうか（一艸氏・談）

斎という人がいます。彼は次のような言葉を遺しています。

我より前なる者は、千古万古にして、我より後なる者も、千世万世なり。仮令（たとひ）我れ寿を保つこと百年なりとも、亦（また）一呼吸の間なるのみ。今、幸に生れて人為（た）り、庶幾（こひねが）はくは、人為るを成して終らば、斯（すなは）ち已（や）まん。本願此（ここ）に在り。　（佐藤一斎）

自分より前に生きた人、自分より後に生きる人は膨大な数に上ります。自分が生きている時間は、悠久の流れの中ではわずかに一呼吸にすぎません。しかし、幸いなことに自分は犬猫ではなく人間として生まれた。それならば、生涯をかけて人間性を磨き、人として成就できればそれでよい。「本願此に在り」とまで彼は言っています。

一斎の言葉に、非常に有名な一言があります。聞いたことのある方も多いかもしれません。

一燈を提げて
暗夜を行く。
暗夜を憂うる
ことなかれ。
ただ一燈を頼め。　（佐藤一斎）

先が見えないことがあっても、たとえ迷いの中にあっても、自分の中に「一燈」と思えるものがあるとするなら、それをひたすら信じて歩むこと。それが大事だと彼は言っているのです。人生、一瞬後のことなど誰にもわからないもの。「一燈」があれば、それを頼んで生きていけます。

制度の充実は確かに大切。しかしまず、誰もが認める「一燈」を作ることに力を注いでください。

書・題字＝岡 一艸（おか いっそう）

国内外で活躍中の現代書家。「絵のような書」を模索し独自の創作活動を行っている。パリ国際サロン創立会員、毎日書道展会員
http://www.isso-art.com

受賞実績

1997　第30回現代書展／大澤賞（最高賞）
1999　スペイン美術賞展（バルセロナ）／優秀賞
2001　日本・フランス・中国現代美術世界展／中国美術家協会賞
2002　第35回現代書展／大澤賞（最高賞）
2003　イタリア美術賞展／優秀賞・プレスキッド賞、第11回パリ国際サロン／ザッキ賞
2005　第13回パリ国際サロン／最高賞、サロン・ドートンヌ展（パリ）／入選（以降07年、08年、09年も入選）
その他多数